長洲町立長洲小学校　校長便り　№１０１

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和5年6月22日(木)

【独り言】

「自分の将来を変えるには、自分が変わるしかない。」私達は教師が故に、子供達を教師たるこの力で変えようとしてしまう。子供達の将来に資するために、教師としてのパフォーマンスで良き方向に導こうとする。しかし私には少々違和感がある。私の教師としてのスタンスは「児童の未来の支援者」だ。何故なら、私達が何かしたからと言って、子供達の夢が叶えられるとは限らないからだ。それ故、私は子供達が自分自身の改革のために多くの情報を提供し、選択肢の幅を広げ、人生経験を伝え、未来を予測し易くなるようにしている。これまでの経験則から、はっきり言えることは「自分の将来を変えるには、自分が変わるしかない。」ということだ。自分自身が納得し、自分自身による自己改革には、底知れない推進力がある。それに気付いた子供達は、その後の成長に目を見張るものがある。その逆もあるのも事実だ。長洲小学校の子供達全員が、前者になることを願って止まない。

雑感　親友の母の死

親友と言うとそう沢山はいません。私にとってはこれからも付き合っていくであろう親友は2人です。一人は小学校では違うクラスで、中学、高校と6年間一緒に過ごした奴A。もう一人は小学4年から中3まで同じクラスだった奴Bです。こいつら（言葉遣いが不適切ですがこの方がニュアンスが伝わると思うんですよ。）とはことある度に飲み、口喧嘩ばかりの親友です。それだけ何でも言える仲間なんだろうと思います。

一昨年、Aから連絡がありました。こいつから連絡があることはあまりないので、何か重大なことかなとは考えていました。Bの母親が亡くなったというのです。Bの母親とは私も小学校の低学年から面識がありましたし、地域コミュニティの中で友達のお母さんということもあり、叱られたり、諭されたり、優しく包んでくださったりと、私には地域の母親的なつながりを感じていた方でした。連絡を受けたときは非常に大きなショックを受けました。私の母親はBの母親と職場を同じくしたこともあり、同様にショックを受けていました。

通夜当日。粛々と進むセレモニーの中で私は子供の頃のBの母親と接する場面を思い出していました。同じ団地に住んでいて、私の母親が仕事でいなかったとき、「昼ご飯食べに来んね。」といって、そうめんをごちそうになったこと、このそうめんが凄く美味かったこと、そうめん食わせて貰ったと母に話したら、私の母親がぶどうを持ってBの家にお礼に行ったこと。ふと、思い出すと一つ一つが切なくてたまりませんでした。

通夜の後半、御導師様がこう仰いました。「人間の死は、すぐ身近にあるものです。だから、今こうして生かされていることに感謝して、命を大切にしていくことが故人に対する感謝なのだと思いますよ。」確かにそうだなと思いながら、通夜の席を後にしました。

最近の若者に伝えたい。命は最後まで燃やし尽くすためにあるもの。与えられた命を適当に使ってはならない。勘違いしてはならない、君の命はたった一つしかないのだ。無駄にしてはいけない！

シリーズ「自分を語る」#101

韓国の研修員、チェさんも同様に帰国の手続きが進みました。チェさんは熊本発アシアナ航空の飛行機で帰国しました。仁川（インチョン）空港経由で帰国したため、少々時間がかかりました。チェさんのご自宅は韓国の忠清南道にあるため、南下する必要があったためです。韓国に到着したチェさんは私に国際電話をくれました。「フジニツキマシタ。サウダサン、オクサントカンコクニキテクダサイ。」嬉しい一言でした。自分の教え子が世界各国で活躍していると思うと、身の引き締まる思いと同時に、国際人としての資質を考えさせられる時間でもありました。

さて、残るは県費留学生2名です。ブラジルからの留学生でしたね。彼らもそれぞれの大学で多くの研修と思い出を胸に、帰国の準備をし始めていました。その様な忙しい生活の中で、彼らが私を食事に誘ってくれました。私自身も忙しかったのですが、早めに県庁を出て下通りのお店へ。

談笑しながら、彼らが口にする言葉は思い出と同時に、私に対する感謝の気持ちでした。「澤田さんが私達の担当者でよかった。そうでなければ、こんなに楽しい留学にはならなかった。」とか、「澤田さんの従兄弟もブラジルにいるのでしょう？絶対に遊びに来てください。」等々、嬉しくなる言葉ばかりでした。ブラジルからの留学生や研修員は、以前お話したとおり、日本語のコミュニケーションができます。よって、どんな席でも会話は日本語です。私は外国の肩とお酒を飲んでいるという感覚は、殆どありませんでした。どちらかというと教え子達、あるいは弟達と飲んでいるようなそんな感覚でした。

２人の留学生は年度末ギリギリまで日本にいるため、研修報告は早めに提出していました。私は、研修員や留学生の報告書を点検添削した後、課長決裁を貰って浄書センターで印刷となります。県庁の地下2階（当時）にある大きな印刷室です。そこで「このように印刷をお願いします。」と言うと、印刷製本までやってくれました。それを、私が各国の熊本県人会や研修関係施設、支援団体に送付します。何か卒業文集を作っているような気がして、嬉しかったことを思い出します。その作業と並行して、留学生の帰国に関しての事務手続きも行っていました。更に、この時期は次年度の留学生の募集をかけ、留学生を決定し、来日させる為の手続きとこちらでの生活がスムーズにできるように手続きをする必要がありました。3社月積もりについては慣れてきていましたが、ブラジルやメキシコとの電話連絡は緊張感がありましたね。地球の裏側に電話をかけて、担当者との打ち合わせ、留学希望者との面談等、我ながらよくやったなぁと思います。

いよいよ、留学生帰国の日がやってきました。やはり教え子との別れはほろ苦いものです。福岡空港から成田へ移動し、そこからニューヨーク経由でサンパウロに向かいます。海外経験のない私澤田が、よくもまぁ、地球の裏側から留学生を呼び寄せ、また送り返すなど、ほんとよくやりました。留学生が搭乗ゲートに消えていく姿を見送りながら、いつかブラジルにも行きたいと思う澤田でした。そして、国際課の送別会。いよいよ学校現場へ戻る日がやってきます。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）